

## 自然環境フィールドにおける遊びと活動と管理の展開

栗田 和 弥 (東京農業大学地域環境科学部)

### 1. 身近な自然環境をフィールドとした歩きと遊び

余暇活動として、温泉・行楽地へ出かけること、観光施設を訪ねること、国立公園の景勝地を鑑賞すること、あるいは海外旅行をすることなど、生活圏から遠方あるいは非日常空間へ出かけることに加え、身近な自然環境の半日歩きなど、生活圏に近い余暇空間での遊びが注目されつつある。また、傑出した風景地ではなくても平凡な農村なので休日を通り過ぎることも多くなりつつある<sup>8)</sup>。厳しい労働、環境や、テクノストレスなどと呼ばれる過酷な社会環境から逃れるために、無理をしない余暇活動が増加しているのではなからうか。また、連続した休暇が少ないことも原因なのかもしれない。いずれにせよ、身近な自然環境へ足を運ぶことで、偶然に美しい風景に出会ったり、思わぬ場所に花が咲いていて季節の移り変わりを認識したり、そこで何かを得ることも十分にできるのだ。決して遠方に行かずとも、歩きを通じた個人的、そして現代版の探検、つまり非日常を体験することが可能となる。

「街あるき」、「野あるき」というような言葉が用いられるようになった。これは最近の健康志向とそれに伴うウォーキングブームにも乗じたものといえるだろう。そしてこれらの遊びには、あらかじめ決められた「ルール」がないことも多く<sup>9)</sup>、勝敗を決める「競争」を伴わないことが、固定されたフィールドなどでの遊びと異なるものだといえる。誰もが、いつでも容易に参加できるということである。

一方で、最近では遊ばれなくなってきた「昔あそび」と呼ばれる、農村環境などをフィールドとした子どもの遊びが再発見、再認識されつつある。また、農村環境を巡る独自の散歩コースを設定して、自分の楽しみにしたり、コースや地図をつくるプロセスそのものを遊びとして楽しむことも増えてきている<sup>1)</sup>。これらは、あまり負担をかけずに自然環境を活用する方法であるといえよう。また、土地所有に関わることも少ないといえるし、特定の市民にだけ美しいなどと認識されるに留まらず、一般市民にも注目されるようになれば、環境保全へと発展させていくことが可能となろう。東京都町田市の多摩丘陵においては、市民がマップづく

りを行っている。これは地域再発見と、フットパス(散策歩道)から始まって、やがて雑木林や田畑などの農村景観を保全していく活動を、一般市民に見える形にしたものである。いい換えれば「点」から「面」へと繋げていくことを目指しているといえよう<sup>9)</sup>。

### 2. 余暇活動としてフィールドに働きかけること

現代の都市および農村生活における物質循環から切り離されるに伴い、利用されなくなった雑木林や、谷戸田・谷津田のように地形が細やかなために生産性が低く耕作放棄されがちな土地に対して、新たに、景観的な側面、あるいは余暇活動のフィールドとして関心が集まり価値認識が高まっている<sup>10)</sup>。また、資源として重要であるはずの二次草原や棚田のようにフィールドが放棄等によって数年でがらりと変化していくことが、土地所有者や地元地域にとっては大きな悩みとなっている。それは、「全国雑木林会議」や「全国棚田ネットワーク」などの緩やかなネットワーク組織ができ、活動が行なわれていることや、「草原サミット」、「棚田サミット」が開催されて議論が深められていることによっても理解することができる。

いずれも土地所有者が管理の担い手となることが一般的であり、理想的ではある。しかし、管理の対価などのバランスが崩れていたり、経済的な支援も困難がことが多く、さらに、それらの土地を持続するシステムが確立していない場合がほとんどである。そのような場合、例えば農村景観を楽しむ利用者が自ら自然環境を保全していくことが肝要となっていく。また、これは農村景観に限らず、生活圏外の自然風景地についてもいえることであろう<sup>9)</sup>。

アメリカでは、市民組織に地元の自然環境に密着したハイキングクラブなどのボランティア・NPO組織に対して自然歩道の管理を委託するシステムがあり、運用されている。これは、アメリカ東部を縦貫する長距離の自然歩道であるアパラチアン・トレイル(Appalachian Trail)<sup>2)</sup>などで実践されている。その特徴としては、自然歩道のパンフレットや地図に自分たちの保全管理の担当区間を明記して保全管理を行なっ

ていることの責任と誇りをアピールしていることが先ずあげられる。しかし、何よりも注目すべきは、本来ハイキングという余暇活動を行なうことが主体の組織にとって、自らが利用するフィールドを保全すること自体が持続的な余暇活動を確保することに繋がっているということである。これは理想的なシステムなのではないかと考える。

### 3. レクリエーションとボランティア活動

イギリスでは永く、BTCV（英国自然環境保全トラスト）により、レクリエーションとボランティア活動を繋げる情報のネットワークが形成されてきた。それは、イギリス全土でのフィールドが整理され、「Natural Break」（自然環境での休暇）と呼ばれている活動プログラムが年間を通じ、カタログとなっていることに見てとれる<sup>9)</sup>。現在は「Conservation Holidays」（保全活動をしながらの休暇）となり<sup>9)</sup>、活動の期間や困難さなどに合わせて3つのカテゴリーに区分されている。すなわち、2日から2週間までの活動を「Natural Break」、1～2週間以上の活動で人里から離れて過酷な条件もありうる、例えばスコットランドの山岳での活動を「Action Break」、そして外国で行なうものとして「International Conservation Holidays」（イギリスからみて）海外で保全活動をしながらの休暇と細分化された。以前の呼び名であると自然環境保全に働きかけない活動（例えば、ウォーキングのみ）も含まれてしまうので、より目的が解かる用語に置き換えられたのだ。

ここで重要な点は、自然環境保全に関心のある人や、休日に社会的な貢献をしたいと考えている人が、これを見て、日程や場所、活動内容を選んで参加することができるということである。そして、保全活動に参加することで、休暇をレクリエーションの一環として楽しんでいる訳である。

翻ってわが国では、まだそのような全国的な規模には至っていないといえる。しかし、先述した「全国雑

木林会議」や「全国棚田ネットワーク」などの緩やかな組織や、各地で推進されているグリーン・ツーリズムによって都市住民を農村に呼び集め、農村環境の保全をレクリエーションも含めて行なっていく動きはすでに始まっている。また、市民の自然環境保全への関心や活動への参加も高まってきているようで、自然環境の中での「遊び」とボランティア「活動」とフィールド「管理」の互いが相乗効果をあげていくのではなからうか。

### 補注および参考文献

- 1) 「ルール」はなくても、農村環境を通過することで、ある程度の生産を阻害することになるので「カントリーコード」などと呼ばれる原則に基づいて地域住民や自然環境への最低の配慮が必要となる。
- 2) Appalachian Trail Conference (1990): Appalachian Trail (National Scenic Trail), National Park Service, U.S. Department of Interior.
- 3) British Trust for Conservation Volunteers (BTCV) (1996): Natural Break. BTCV. 50pp.
- 4) BTCV (2002): Conservation Holidays (Global Programme January 2002). BTCV, 48pp.
- 5) 栗田和弥 (2001) : 雑木林利用のポストモダン, 日本造園学会平成13年度全国大会分科会要旨集, pp.73-76.
- 6) 栗田和弥・松本清 (1998) : 山岳自然地域における環境整備と市民参加, ランドスケープ研究 62(2), pp.118-120.
- 7) 日本レクリエーション協会編 (2002) : 仲間と楽しむ散歩コースづくり, レクリエーション 518, pp.7-13.
- 8) 農林漁業体験協会監修 (2000) : 田舎で休日 ～野みちウォーキング～, 小学館 Green Mook, 130 pp.
- 9) みどりのゆび (2002) : 多摩丘陵フットパス (散策ガイドマップ), NPO法人みどりのゆび.